

クニマス の 帰還



みどりのくま

僕は湖の畔で、ずっと湖面を見つめているのだけれども、別段何かをしようという気持ちがあるわけではない。ただ、ぼうっと何を見るでもなく佇んでいるだけのことだ。

人は疲れたら湖を見たくなる、ということがあるのかなのか僕は知らない。しかし、僕が疲れているということはまぎれもない事実だ。人生に疲れているということだ。なぜそうなったのか正確なことは僕にもわからない。

僕は、そんなに勉強しなくても入れる大学でそんなに勉強することなく過ごし、そんなに就活に力を入れなくても入れそうな会社を捜してそんなに期待もされることなく就職し、そんなに懸命に働くというわけでもない日々を過ごして気がつけば五年という時間が経っていた。

それほど成績を上げることもなく、それなりに与えられた仕事をそれなりにこなしながら、僕はそんな生活に満足していたはずだった。

しかしながらそんな可もなく不可もない宙ぶらりんの状態を、社会という奴は放っておかないのだ。それなりに年を取りそれなりに経験を積んだのだから、そろそろそれなりの責任というものを負わなければならないということなのだ。

この四月に入ってきた新人をお前がそれなりにちゃんと教育しろと命じられて、まあそれなりにやればいいのかろうなどと甘くみたのが間違いだった。

人という奴は、それなりに世話を焼けばいいというわけにはゆかないのだ。しかしまあそれなりに気を配って面倒を見ていたつもりだったが、おととい上司から呼ばれて言われたことは、新人が僕のあまりのいいかげんさに腹を立てて教育係としての僕の資質に問題ありとして、担当を替えてくれと直訴したということだった。

僕も少し腹を立てて、そんなことならこっちから願い下げだと言ったものだから上司はもうカンカンで、そのあと二時間も説教されてしまったのだ。

今までならそんなことくらい、やれやれやっちゃったかまあいいやどこかで埋め合わせすればいいだけのことだと気にもしなかったはずなのに、今回は何だか全てがイヤになるくらい落ち込んでしまった。

上司に「お前には社会人としての責任感というものが無いのか！全く今まで何をしてきたんだ」と言われて、それが何だか腑に落ちてしまって、自己嫌悪におちいったというところなのだ。今までの人生が無駄だったんじゃないのかと考えたらどっと疲れが押し寄せてきたのだ。

これからどうしたらいいのだろうかと考え始めた僕は上司に、今後のことを少し考える時間がほしいので三日ほど有給を頂けませんかと言ったら、少し苦い顔をした後で「大丈夫か？まあいい。休んで考えればいい」と許可してくれたのだった。

それから僕はとりあえず着替えやら何やらバッグに詰め込んで、愛車のバイクにくくりつけて当てもなくアパートを飛び出した。あちらこちらと彷徨ったあと、今この湖の畔に佇んでいるというわけなのだ。

湖面をぼんやり見つめる僕は、その時おや？と思った。黒い影のようなものが水面下をこちらへ近づくように見えたのだ。大型魚だとしてもかなりの大きさだ。それともジュゴンでも放し飼いでいるのだろうかと思ったがそれはありえないと考え直す。いや、それともこの湖に棲む伝説の主なのだろうか。だとしたら大発見だなと考えながらしばらく観察してみる。

すると少し尖った頭がひょっこり現れてすいすいこちらへ泳いでくる。なあんだ、誰かここでダイビングでもしているのかとちょっとがっかりしたのもつかの間、岸にたどり着いたそいつが立ち上がるとそれは魚のかたちをしていた。

僕は何が起こったのか飲み込めないままそいつを凝視していると、ずんずんこちらへ近づいてくるのではないか。何だ何だと僕は身構える。一直線にすたすた歩いてくる。周りを見回しても平日の誰もいない静かな湖畔である。そいつは間違いなく僕を目指して来ているのだと確信した。体が震える。どうしよう。

混乱する僕にはお構いなしに、そいつは目の前まで来てじっと僕を見つめるのだ。

「あの、どちらさまですか？」

おかしなもので、あんまりびっくりするとかえって落ち着いて話せるものなのだと僕は感心していた。

「わたしはクニマス。クニちゃんと呼んでいいわよ」

そいつは、にこっと笑った。

僕は、そいつのことをあらためて頭からつま先までしげしげと観察する。全体としては魚のかたちをしているけれど、ちょうど喉のあたり（魚に喉があるのかどうか知らないのだが）に「顔」があり印象としては化粧っ気のない娘のすこしあどけない感じだ。体の側面にあるヒレのあたりから細い腕が出ている。尻尾のすこし上あたりから足が出て大地を踏みしめている。そう、これは魚の着ぐるみをかぶった人のような姿をしているのだ。しかしそいつが着ぐるみでないことは、うまく言えないのだけれど雰囲気から伝わってくるのだ。これは一体何者なのだろうか。僕は夢でも見ているのだろうか。

「ええと。そのクニちゃんが僕に何の用ですか」

我ながら何を言っているのだろうか。

「ずっとひとりでヒマそうにしているみたいだから、あなたにお願いしようかと思って」

「えっ、何をですか」

「ちょっとお手伝いしてもらえるかしら」

「・・・」

「わたしをふるさとまで連れて行ってほしいの」

ここは、西湖と呼ばれる湖である。富士五湖の一つ。僕がなぜこの湖にたどり着いたのか正確にはわからない。子供の頃に家族に連れられて来たことがある。しかしそれもここへたどり着いたときそう言えばと思い出した程度に印象は薄いのである。

家族か。もうだいぶ長い間親とも会っていない。大学生になってひとり暮らしを始めて、年に何度か帰省するくらいになり、働き始めてからは、そう、初任給のほんの少しばかりで食事をごちそうして以来だからもう五年になるのか。たまに電話で話す程度でそれも近頃回数は減っている。

家族に限らず、人間関係というものが鬱陶しくて誰とも深くつき合うことをしなくなって、ゆるやかに繋がるトモダチばかりの関係がすごく楽で、ずっとこのままでいいと思っていたのだ。

しかしそれは幻想でしかなかったのだと、今は思う。人はひとりでは生きてはゆけないのだ。だから人間関係のめんどうくさいことから逃げることはできないのだ。社会からふるまわれる果実には、ちゃんと代償が要求される。いいところ取りを許してはくれない。その証拠と言っていいのかわからないが、トラブルはこちらの都合などおかまいなしにあっちからふいにやってくる。避けることはできないどうしようもないことなのだ。

そして今、僕は何かに巻き込まれつつあることを自覚した。

「ええと、クニちゃんのふるさとはどこですか」

「うん、田沢湖」

「その、田沢湖ってどこにあるんですか」

「うん、秋田」

僕は困惑してしまった。秋田へは行ったことがないのだ。東北地方であることは知っている。それから……。思い浮かばないのだ。

「悪いけど、僕はそこへどうやって行けばいいのかわからないんだ」

ここは残念ではあるけれどもお断りするしかない。他を当たっていただくしかない。言い訳は立つだろう。そうなのだ。僕に責任は無い。これで面倒から逃げられる。それでいいのだ。僕のせいじゃないんだ。

「あら、そんなのスマホでちょっと調べればわかるんじゃない」

クニちゃんは意外そうな顔でそう仰るのだ。

え？そんなこと言うんだ。ますますただの魚ではなさそうだ。僕は感心しながら、しかしこれは逃げられないなと観念した。これは僕に舞い降りた災厄であるらしい。

「じゃあ、調べてみるからちょっと待って」

僕は田沢湖の場所を検索する。予想通りというべきかここからはかなり遠い。さて、どうしたものか。道路と鉄道の経路を調べてみる。すると、上野から新幹線だと三時間弱とのこと。今からだと夕方の列車に乗れるだろう。そうすれば夜に着くことができるだろう。どこかに宿を取って、明日の朝一番で送り届けて帰ってくれば、あさっての仕事には差し支えなさそうだ。うん、それでいこう。

「わかったよ。今すぐ出発すれば明日の朝にはご希望どおりふるさとへ帰れるだろう」

僕はすっかりその気になっているのだ。何だかおかしいよね。

僕の回答に、しかしクニちゃんは横目でチラチラ僕のバイクを見ている。ははあ、そういうことか。

「心配しなくてもいいよ。上野から新幹線だから。でもここから、そうだなあ、二時間か三時間かそのくらいこいつの後ろに乗ってもらわなければいけないけどね」

僕はタンDEMシートを空けるために荷物をタンクの上にくくりつける。そしてふと、クニちゃんを振り返る。

その視線に気づいて、クニちゃんは僕の考えを察してふっと笑ってから言ったのだ。

「わたしが乗ると、シートがぬとぬとするんじゃないかと思ってるでしょ。わたしこう見えてけっこうさっぱり系なのよ」

ほらさわってみなさいよ、という顔をする。僕は少し遠慮して背ビレのあたりをそっとなでてみる。なるほど、ウエットスーツの素材のような手触り。やわらかいけどさらさらとしている。

「でもね」とクニちゃんは続ける。

「乾燥はお肌の大敵だから、何か羽織るもの貸してくれないかな」

僕はちょっと思案して、風を通さないものは何だろう、そうか合羽があるなと気づいた。バッグから取り出して確認する。

「これ。合羽だけどこれでいいかな」

クニちゃんはにっこり笑った。

バイクの後ろに合羽を着た魚を乗せて走る姿は、たぶんとてもシュールだと思う。信号で停まる度に、道ゆく人々がじろじろ見ているのがわかる。少し恥ずかしいけれどまあいいか、高速に乗るまでの辛抱だ、そのあとは一息で行ってしまうのだから。

ところがそういうわけにはゆかなかった。五月だというのに真夏日を記録することが続く気候で、クニちゃんは高速に乗ってすぐに「喉が乾いたわ。何か飲ませてよ」と耳元でささやいた。しょうがないな、つぎのサービスエリアに入ることにするか。

そんなことを考えながらしかし、この状況を楽しんでいる自分に気づいた。こうして誰かと一緒に旅をすることなんて本当にひさしぶりのことだ。僕は密かにこんな事が起こるのを期待していたのかもしれないなと思い、ひとりで苦笑いするのだった。

僕は、缶コーヒーをすすりながら、まったりとしている。隣ではクニちゃんが、ミネラルウォーターでいいわよと言っていたのが、サービスエリアでいろいろ見ているうちにやっぱりマンゴージュースが飲みたいということになり、今はその後のソフトクリームをおいしそうに食べている。

僕達を数人の子供が遠巻きにしながら、あれは戦隊ヒーローに出る新しい怪人に違いない、いやいやあれはご当地ゆるキャラだよと議論をしている。

僕はそんな様子をぼんやりと眺めながら、少し不安になってきたのだ。あの、人であふれる場所にクニちゃんを連れてゆくことに。恥ずかしいとかいうことではもはや無いのだ。大騒ぎになって、何かトラブルにでもなったら困るなということなのだ。このままバイクで高速をひた走り、なるべく人のたくさんいる場所を避けて現地まで行くほうが賢明なのではあるまいか。

しかし、クニちゃんはそうとは言わないのだけれど、やはり彼女は乾燥には弱いらしいのだ。この短い距離だけでも元気が無くなったような気がするのだ。とても長い距離を風に吹かれながら移動することは無理があると思われるのだ。これは、覚悟を決めるしかないな、そう思った。

僕の心配は全くの杞憂だったようだ。バイクを預けるためにいつも世話になっているバイク店に寄ったとき「ほう、今日はさんまとデートかい」「何でさんまなんですか」「だってお前のバイクはメグロだろ」「あはは、目黒のさんまですか」というくだりがあったものの、街でも駅でもチラリとは見るものの皆すぐに関心無さそうにして何事もないのだ。この街では毎日あらゆることが起きていて、それに皆は慣れてしまってすっかり退屈しているというわけだ。

僕だってそうだ。他人の事などまるで関心が無くて日常を暮らしていた。

いた？

そうなのだ。この街の空気に違和感など抱いたことは無かったのだ。それなのにどうだ。今の僕はこの場所がとても不自然に思える。さっき窓口で「田沢湖まで。自由席で大人二枚」ときっぷを買ったときも、一瞬げんな顔はされたけれども何も言わずに売ってくれた。まるでクニちゃんが街に溶けこんでいるような。

いや、そうではない。

まるで溶けて無くなって存在していないような雰囲気がある。そう思ったときから僕はたまらなく息苦しいのだ。今はただ、少しでも早くこの街をあとにしたい。ホームでこまちを待つ時間がとても長く感じられた。

こまちの車内は込んでいたけれど、ほとんどはビジネス客らしく皆押し黙ってスマホをいじったり雑誌を読んだりしている。僕は少しほっとしていた。窓側の席のクニちゃんは、ホームで買ったアイスをすぐに食べようとするから「こういうのは少し溶けてやわらくなってから食べるんだよ」と教えてやったのが気に入らなかったのか少しすねた顔で窓外の流れる景色を眺めている。

先ほどから少し気がかりなことは、離れた席のご婦人が時折こちらを見ては何か言いたそうな様子であることだ。でもまあ総じて何事も無さそうな様子なので、このまま行けそうな気がしてすっかり安心していた。

列車が大宮を過ぎてからのことだった。気になっていたご婦人がやおら立ち上がりこちらへ近づいてきたのだ。僕は身構えて彼女と対峙する。

「失礼ですけど、あなたのお連れさん、クニマスですよね」

僕はウソをつく理由もないから正直に答える。

「そうですけど、何か」僕は訊ねる。

すると、彼女は相好を崩してこう言ったのだ。

「噂では聞いていたのよ。そろそろ里帰りするって」

彼女の話はこうだ。西湖でクニマスが発見されたという報道があってから、地元ではいつかクニマスを里帰りさせようと準備してきたのだという。そしてついにそれが実現する運びとなり皆大喜びしていたのだ。まさかその場面に遭遇できるなんてと感激なのだという。

「もう先方には連絡したの、ええ？」

僕は何だかあっけにとられる。

「いえ、まだ」と言うと、すかさずこうだ。

「あらあらそれはいけないわ。私にまかせてちょうだい。知り合いがいるから。今連絡するから」

そう言い残して、デッキへ電話を掛けに行ってしまった。僕はクニちゃんに「大丈夫かな」と訊いてみたのだけれど、さあ平気なんじゃないという顔をしている。

しばらくして彼女が戻ってきた。

「駅に迎えに来てくれるって。私は秋田市まで行くから一緒に行けなくて残念だわ。握手だけでもさせてね」

クニちゃんの手をがっしりと握ってから、じゃあくれぐれも気をつけてねと言い残し去っていった。何だかパワフルな人だなあとしばし呆然としていた僕だが、まあ何だか知らないけど駅に着いてからのことを心配しなくて良さそうな感触だから、まあ良しとするかとひとり納得したのだった。

駅へ降り立つやいなや、まっすぐに僕達のところへ近づく人がいる。

「こんばんは」あたりはもうすっかり暗くなっていた。

「観光振興課のサワタと申します。よろしく」彼女が名刺を差し出す。

僕は、サラリーマンの悲しき性かな、反射的に「あ、どもども。営業のカワイです」と名刺を交換してしまう。

サワタ氏は「今日はお疲れでしょう、宿をご用意しておりますのでゆっくりお休みになって、くわしいことは明日ということではいかがですか」というありがたいご提案。僕に異存はない。クニちゃんもそれで結構よという顔をしている。

「では、お言葉に甘えさせていただきます」

旅館は少し離れたところにあるという。車で小一時間ほど揺られて風情ある秘湯へと案内される。

明朝八時に迎えに来てもらう手筈を確認してサワタ氏が帰ったあと、おいしい料理を頂いて僕はすっかりご機嫌になり「温泉に行こうよ」とクニちゃんを誘ったのだけれど「わたし温泉苦手なのよ。疲れたからもう寝るわ」と早々にふとんを被ってしまった。

しかたがないのでのんびりひとり風呂です。ピリピリと肌を刺激する湯を楽しみながら、僕は今日のことを振り返る。湖畔でのクニちゃんとの邂逅が遠い昔のような気がする。巻き込まれ型の成り行きまかせの冒険のようで僕はわくわくしているのだ。こんな気持ちになるなどと、日常に埋没していた時には想像することも無かった。僕はこんな状況を欲していたのかも知れない。僕を退屈から連れ出してくれる何か。

しかし、と思う。この冒険も明日には終わるのだ。僕はまたあの日常へ戻るだけなのだ。結局は何も変わりはないのだ。現実はその簡単ではないのだから。

たとえそうであるとしても、もうしばらくこのわくわくを楽しめばいいのだと思う。体中の凝りがゆるやかにほぐされてゆくと共に、僕の強ばった心が弛んでゆく感覚に僕は身をまかせた。

心地よい眠りから目覚めた僕は、こんな気分のいい朝はいつ以来だろうなどと考えていた。まだ六時前で部屋は薄暗い。クニちゃんはどうしたかなと見ると、ふとんは魚のかたちに盛り上がっているけれど中身は空っぽで、朝の散歩にでも出かけたのかと思って部屋を見回せば、クニちゃんは縁側のイスに腰掛けて少し緊張した面持ちで外の景色を眺めている。

僕は声を掛けるべきかどうか少し迷ったのだけれど、思い切って「おはよう。よく眠れたかい」と問いかけてみた。クニちゃんは微動だにせずじっと窓外を見つめている。顔色、とっていいのかわからないけれど、少し青ざめてみえる。僕は次の句が続かず困惑する。念願だった里帰りが叶ったというのにどうしたというのだろうか。

「わたしね」クニちゃんは静寂を破る。

「わからないのよ」

「何がだい」僕は問いかける。

「わたしね、本当に里帰りがしたかったのかわからなくなって、そのことをずっと考えていたのよ」

僕は何と言っているのかわからなかった。夢が叶って、しかしわけもなくブルーになること。そういう気持ちなのだろうかと思像はしてみる。しかしいまひとつわからない。

「だって、帰ってきたかったんでしょ」僕はそんなことを口走ってしまった。

クニちゃんはこちらをキッとにらむ。

「そういう言いかた、ひどい」そして悲しそうな顔をする。

僕は再び沈黙する。クニちゃんは続ける。

「だってね、わたしは生まれも育ちもあの湖なのよ。わたしの先祖がかつて暮らした故郷は、わたしにとって未知の場所なの。不安があって当然でしょ、ちゃんと暮らせるのかしらって」

僕はクニちゃんの言葉を胸の奥で反すうしながら考える。未知の場所か。僕にとって未知の場所とはどこだろう。そしてそこで暮らすとはどういうことだろう。僕は故郷を離れてあの街で暮らし始めた頃のことを思い出す。誰も必要以上に干渉してこない、僕には居心地のいい街。最初はそうだったし、つい最近までそう思っていた。でも今は違和感に気づいてしまったあの街の相貌。

そう。暮らしてみなければ、この身で体験しなければわからないことなのだ。クニちゃんは今から始まる未知の新しい環境での暮らしに後込みしている。でも、始めてみなければ答えは見つからない。

「僕は」静かに問いかける。

「始めてみなくちゃわからないと思うよ。暮らしてみてそれからどうするか決めたっていいんじゃないかな」

「あなたは何も知らないのね」そうクニちゃんをつぶやいたきり、また窓のほうを向いてそれきり黙ってしまった。

ロビーには噂を聞きつけて近所の人たちが集まっていた、クニちゃんは握手攻めに遭っていた。

「大変な人気ですね」僕は迎えに来てくれたサワタさんに話しかける。

「ええ。なにしろ長年あちこち捜しても見つからなかったのに、ひょっこり偶然に発見されたのですから。皆さんの期待はふくらんでいたのですよ」うれしそうに言った。

念願の帰還か。今朝のクニちゃんの様子を思い出しながら僕は複雑な気持ちになった。

田沢湖へ着いたころにはけっこうな人ばかりで、皆口々に「おかえり」「かわいい」ということを言っている。凱旋といった体だ。

クニちゃんは浮かない顔をしている。僕は意を決してサワタさんに訊いてみることにした。

「実は、クニちゃん、こちらでの生活に不安を抱いているようなのです。ところでこの湖ではクニちゃんの仲間はどのように暮らしているのですか」

一瞬げんそうな顔をして、それからサワタさんは説明を始めた。

「田沢湖のクニマスは、絶滅したのです」

僕は、あっと思った。よく考えてみればこれまでの経緯からそのくらいの想像が出来て当然だったのだ。ふるさとへ帰るクニちゃん、歓迎する人々、そして「発見された」という言葉。

僕は何も知らない。僕はくわしく知りたい。

「差し支えなければ、くわしく聞かせてくれませんか」

僕の求めに、サワタさんは応える。

「田沢湖は元は自然の小さな沢が流れ込むだけの湖でした。戦時中の電力需要を満たす求めに応じるため田沢湖水を利用する水力発電所が建設されました。流出する湖水を補うために玉川から水を引いたのですが、この水が玉川毒水と呼ばれる強酸性で・・・」

毒水？僕の心はかっと熱くなった。

「・・・田沢湖は急速に酸性度が進みました。戦後すぐの調査でクニマスの絶滅が確認されたのです」

「それって」僕は叫ぶように言った。

「人間の都合で絶滅したってことですよ」

皆、押し黙っている。僕はすぐに非難めいた言い方をしたことを後悔した。人間による環境破壊が原因で絶滅した種は数多くある。僕がそれをとやかく言えるわけがないのだ。

「違うのよ」クニちゃんが叫ぶように言った。

「誰かが悪いとかそういうことではないのよ。しかたがなかったのよ」

でも、と僕は言いかけてやめた。クニちゃんは続ける。

「玉川の水は酸性度が高くて毒水なんて呼ばれているけれど、それは玉川温泉の源泉から流れ出る湯の影響なのだから。この土地の宝である温泉がもたらす副作用なのだから」

温泉？そうか、あのピリピリと刺激のある温泉か。

「利用できる河川水が他に無かったのだから、それはしかたのないことだったのよ」
クニちゃんが泣いている。僕は周りを見回す。集まった人たちのすすり泣く声が嗚咽が聞こえる。
僕は心から後悔した。

「ごめん。そういうつもりではなかったのです」クニちゃんとサワタさんを交互に見ながら僕は弁明した。

「水力発電の為だけでもないのです。当時の知見の状況においては、酸性度が高く農業用水として適さない玉川の水を田沢湖の莫大な水量で希釈して河川周辺の農業用水に利用できないか、食料の増産が実現できるのではないかと考えたのです。しかし結果は湖水の酸性化が進んだだけでした」

サワタさんは沈痛な声で説明をする。

「現在、玉川の河川水は源泉から流入する段階での中和作業が進み酸性度はかなり低下しています。田沢湖水を元に戻すための中和作業は続けられていますが、残念ながら道半ばでいまだ達成できていません」

「でも」サワタさんは続ける。

「いつかクニマスが住める環境を達成するつもりです。それまでは新しく建設された施設で待っていてもらうことになります」

そうか、ふるさとの皆さんは希望を持っているのだ。僕はクニちゃんを元気づけようと思った。

「大丈夫だよ、みんなクニちゃんのことを大切に思ってくれているよ。だから心配しなくて平気なんだよ」

涙を拭いながら「そうね、そうよね」とクニちゃんは自分に言い聞かせるようにつぶやくのだった。

「湖を近くでご覧になってください」

サワタさんの案内で僕とクニちゃんは湖に近づく。透明度の高い湖水はエメラルドグリーンからインディゴブルーへの美しいグラデーションをみせている。僕は魅了されて言葉を失った。なんて美しいのだろう。しかし、この場所にクニちゃんは住めないのだ。とても不思議な感覚にとらわれる。

「水深は四百メートルを超えます」吸い込まれそうだ。

「しかし、これだけ深いことが中和作業を難しくしているともいえます」

「クニマスは深いところに住むのよ」クニちゃんが補足する。「深い場所は変化しにくいみたいななの」

僕は説明を聞きながら、先ほどから気になっていることがあった。思い切って訊ねてみた。

「あそこに金色に輝く像がありますね。あれは何でしょうか。もうすでにクニちゃんの像が出来ているなんてことはないですよね」

サワタさんは、すこし笑ってから教えてくれた。

「この湖にまつわる伝承に、たつ子伝説というのがありますね。あれはたつ子をかたどった像なのです」

あらましを聞くとこうだ。

むかしむかし、たつ子というそれは美しい娘がおったそうなの。

たつ子には悩みがありました。それは自らの美貌がいつか衰えるのではないかということ。

そこで観音様にお百度の願掛けを行ったそうなの。

すると観音様はたつ子の願いに答えて、その水を飲めば衰え知らずという山深いところにある泉の場所を教えてくださいました。

ある日のこと、たつ子は母にはそのことを告げずに泉へと出かけてその水を飲んでみたそうなの。

するとどうでしょう、飲んでも飲んでも喉が乾きます。たつ子は泉の水を飲み続けます。

やがてたつ子の姿は龍となります。自らの浅はかさが招いた罰だと悟ったたつ子は、田沢湖に身を沈めて湖の主となったそうなの。

たつ子の母はその身を案じてあちこち捜します。やがて湖の畔で再会するのですが、わたしの姿はたつ子に見えてその実は龍なのですよおかあさんもう一緒には暮らせないのですよと告げて湖に消えてゆきます。

悲しむ母は、別れを告げる娘を想って松明を投げます。その松明は水に入ると魚の姿となります。それがクニマスだということだそうなの。おしまい。

「そんな言い伝えがあるのですね。たつ子さんはじゃあクニちゃんの遠い親戚みたいなものではないかな」

そう言う僕をクニちゃんはニヤニヤしながら見ている。少しは元気になったかなと僕は胸をなで

おろした。

「ところでどうして遠く離れた西湖でクニマスは発見されたのですか。まさか湖底が繋がっているわけでもないでしょう」

サワタさんは苦笑いしながら教えてくれた。

「実はクニマスが絶滅する前の話なのですが、人工孵化実験をするために何カ所かの湖を持つ自治体に受精卵が提供されていたのです。その記録を元に、どこかで生存しているのではないかとということでずいぶん捜しました。でも結局見つからなかった。あきらめていたのですが、数年前に西湖で偶然捕獲されたクニマスに偶然それと気がついた。本当に奇跡だと思いました」
なるほど。忘れられることなく探し続けた人たちの情熱が生んだ奇跡か。

「忘れられることがいちばんつらいことなのよ。わたしは忘れられていなかったのね」
クニちゃんはまた泣きそうな声なのだ。やれやれ。でもいい話だなと僕は思った。

僕はクニちゃんと二人で湖畔にちょこんと並んで座っている。湖を渡る風が気持ちいい。僕の役目は終わった。冒険も終わりだ。わかっていたことだけれども少しさびしい。クニちゃんはこちらで新しい生活を始める。僕はあの街に戻り、日常に戻る。それでいいのだ。

「ありがとう。感謝の言葉もないわ」クニちゃんはぼつりと話す。

「もうお別れだね」僕は応える。

「そうね。短い間だったけど楽しかったわ」

「僕も楽しかった」

「そう。よかった」

沈黙が流れる。

「ひとつ訊いていいかい」僕はクニちゃんに問いかける。

「何」

「どうして僕だったんだい。どうして僕にふるさとへ帰る手伝いを頼んだんだい」

「あら、そんなこと」クニちゃんは意外そうな声で言う。

「だってあのとき、他に誰もいなかったじゃない」

そうだよな。僕はたまたまあの場所に居合わせただけなのだ。誰でもよかったのだ。

そんな僕を見つめながら、ふっといたずらっぽく笑ったクニちゃんは続けた。

「冗談よ。わたしね、あの時のあなたの目をよく憶えているわ。何かを思い詰めたように湖面をじっと見ていたわ。もしかして湖に飛び込むんじゃないかって」

僕が？まさか。

いや、そうかも知れないな。あの時の僕は心が空っぽだった気がする。もちろん飛び込んだりしないけれど、そう思われてもしかたないな。

「でもね」クニちゃんは続ける。

「その、あなたの目を見ていると、とてもさびしい気持ちになってきたの、この人は孤独を生きているんだわきっと。そう思った」

孤独か。僕は考える。あの街の空気、いや水はひどくにごっていて、僕はそれが僕の姿をカムフラージュしてくれると思ったのだ。この水に慣れて暮らせばこんなに楽な場所はないと。でも、にごった水はやっぱり息苦しかったということなのだ。僕は気づかぬうちに窒息しそうになりもがいていた。もっときれいな水のところへ、たとえ自分のみにくい姿をさらすことになるとしても。

「だからね」クニちゃんの言葉に我に返る。

「この人ならわたしの気持ちをわかってくれるんじゃないかって、新しい場所で新しい生活を始める決心をしたわたしの気持ちをわかってくれるんじゃないかってね」

「不安かい」

「うん、平気。わたしはひとりじゃないもの。あんなにもたくさんの人たちがわたしのことを見守ってくれているのだもの」

「そうか」

「まだ道のりは遠いけれども、わたし信じているもの。必ずここでクニマスが生活できる日がくることを」

「きみは強いんだね」

「始めてみなきゃわからないって、それはあなたが教えてくれたことよ」

そうか。ならば僕も始めてみなければならないな。自分で言ったことなのだから。

「じゃあ。本当にお別れだね」

「ええ。元気でね」

「きみも」

「それから、こんなところで寝たらカゼ引くわよ」

え？それはどういう・・・

視界がぐにやりとなった。

夜空だ。星がまたたいている。

ここはどこだろう。ぶるっと震えてから僕は起きあがる。湖を渡る風が冷たい。

僕は眠ってしまったのか。周囲を見回す。誰もいない。

夢を見ていたのか。そりゃそうだよな。僕は納得する。現実には魚が歩くわけないし喋るわけないし。

夢か。夢について考えてみる。なぜ夢を見るのだろうか。夢にみることは、僕が実際に経験したことの反映だ。知らないことを夢で見るとは不可能だ。ただし、実際の経験といってもそれはつまり見知ったものを役者や小道具として利用しているという意味だ。夢に上司が出てきてもそれは上司の顔かたちをした人物に過ぎず、その人物が夢の中で演じる役は上司役であるとは限らない。

夢を思い出そうとする。すでにもやがかかっている輪郭が定かではない。

どうして行ったこともない場所が夢に出てくるのか。それは、断片的な情報として意識的にも無意識的にも洪水のように流入してくる情報化社会に生活していることの影響であろう。つまりバラバラでいいかげんな情報の断片を都合よく繋ぎ合わせた不出来のフィクションが夢の正体なのだ。だから知らないはずの場所を舞台とした一幕のコメディを夢として見たことは何ら不思議なことではないのだ。

しかし、と思う。夢という舞台装置の構造はそうであったとしても、そこで演じられるコメディにはテーマがあるのだ。物語を通じて何を言いたいのか、そのことが重要なのである。僕はなぜあんな夢を見たのだろうか。僕が僕自身にあの夢を通じて何を言いたかったのだろうか。僕の心の深い淵に沈むものは、あの夢によって何を訴えかけていたのだろうか。

ぞくぞくっと悪寒が走る。

・・・。

これは、本当にカゼを引きそうだ。昼夜の寒暖差が激しい時期は体調を崩しやすいと言うからな。だいぶ長い時間眠っていたようだな。体が芯から冷えているぞ。すぐ体を温めないと。そうだな、何か温かいものが食べたいな。

ぐうとお腹が鳴いた。

「センパイ聞いてくださいよ大変だったんすから」僕は朝から新人くんのまくしたてる言葉に飲み込まれていた。ところでこいつ、こんなにしゃべる奴だったっけ。

僕が休んでいる間に、取引先から急な見積依頼があって、新人くん張り切って仕事したのはよかったのだけれども、見積書に初歩的なミスがあって先方はひどくご立腹といった塩梅なのである。やれやれ。でも、僕も駆け出しの頃にやったよな、こういうの。

当然の事として僕がフォローしなければならない。さてと。あそこの購買部長は瞬間湯沸かし器で有名なのである。しかし冷めるのも早いことはこれまでの経験から実証済みなのである。まあ、なんとかなりそうだ。

「ところで、先方にはアポは取ってあるのかな」直接あやまりに行くのである。

「はい。午後二時っス」

「直した見積書は」

「これっス」

僕は書類をチェックしながら「大丈夫大丈夫心配するなって」となぐさめるのだが「もう無理っス」と新人くんすっかり落ち込んでしまっている。やれやれ。

僕の予想は半分当たって半分外れた。終始あやまって何とか納得はしてもらえた。しかし、瞬間湯沸かし器には保温機能が新たに追加されたらしくて、冷めるまでにだいぶ時間が掛かったというわけだ。腑に落ちないので帰り際にその知り合いの社員をつかまえてそれとなく訊いてみたところ、なんでも先日溺愛する娘さんが彼氏を連れてきてそれ以来ご機嫌斜めなのだそう。なるほどそういうわけでしたか。

外へ出るともう辺りは真っ暗だ。夜風が心地いい。

新人くんはもうぐったりとして、顔色に精気がまるで無い。僕も何だか疲れたな。

スマホを取り出して社へ連絡を入れる。上司は今すぐ帰って始末書を書けて言うけれど、そんな気分じゃないんだよなあ。

僕が「明日書きますから。今日は直帰しますけどいいですよ？」と言ったら激怒された。それでもなんとか言い訳をならべて許可を取る。

「今日はもう帰っていいってよ」僕が言うと新人くん少しほっとした顔になる。

「センパイ、そのストラップ。かわいらしいですね」

そう。魚の着ぐるみを被った人のカタチをしたストラップ。

喉のあたりにある「顔」はやさぐれているけれどそこがまたチャーミングなのだ。

あの後、冷えきった体が温かい鍋で弛んでひと段落して、なにげなくみやげものを物色していたのだ。そして、こいつを見つけたときには全身がビリビリときた。やっぱりクニちゃんはいたんだよなと。

正式な名称はそういう名前ではなかったみたいだけど、僕にはクニちゃん以外の何者でもない。早速購入して今ここで僕を見つめながらゆらゆらと揺れている。

僕はふわりと背中を押された気がした。

「ちょっとつき合うか？」僕は手真似で飲みのサインをしながら新人くんを誘ってみる。

「いいスね。この近くに学生の頃バイトしてた比内地鶏のウマイ店があるっス」

「ほう、いいねえ」

「地酒も揃ってるっス。うまいスよ」

「よし。じゃあそこで決まりだな」

新しいこと。僕も始めないと。

心の中を風が吹き抜けてゆく。

(おわり)

クニマスの帰還

<http://p.booklog.jp/book/121465>

著者：みどりのくま

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ktnwtuy001/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/121465>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト